

息伝わる字を後世に

「江戸文字」の作品展を開催中の
寄席文字、勘亭流文字の名取

中村 泰士さん 47

江戸時代に花開いた様々な書体も違う。

数百枚展示されている。開

催は今年で三回目だ。

「根っからの落語好きが

高じまして」とこの道

に入ったきっかけを振り返

る。同区内にある下谷神社

そばのトランジスタ工場

と電器店を営む家で育っ

た。両親は共働き。小学校

に上がる前からテレビが友

達だった。毎日のように落

語の番組を見るときは落語

のとりこになった。

大学に進学すると迷わず

落語研究会へ。しかし、「無

口家駄丸」と仲間から匿名

をつけられたほど「話す」

きれず、半年で辞めた。す

に就職したものの、落語に

かかわって生きる夢は捨て

卒業後、「親に迷惑はか

けたくない」と大手百貨店

の普及で、だれでもまねる

ことができるようになっ

た。「時代の流れだから」

と冷静に見る一方で、「人

間が一筆一筆精魂込めて書

いた字からは息が伝わって

くるが、機械でなぞらえた

とは聞いていなかった」。ぐに、寄席文字の書き手と
そんな時、学生相手に寄席して会社を興した。現在は、
文字の勉強会を開いていた落語会の企画やカルチャー
橋右近師匠(故人)と出会った。師匠から転身して講師などしている。
寄席を支える寄席文字の書独立後、「江戸時代から
家になった師匠に目をかけ伝わる、ほかの文字も一緒
られ、弟子として修業を積に伝えていきたい」と勸学
71へ。

ひと近況

「携わった人間として、
後世に伝えることが使命」
と、責任をかみしめてい
る。

問い合わせは同ギャラリー
1(会03・3823・51



橋右近

点